国語科学習指導案

指導者 岡本 恵里香

- 1 日 時 令和6年11月16日(土) 第2校時(10:05~10:55)
- 2 学年・組 中学校第3学年2組 計39名(男子14名,女子25名)
- 3 場 所 中学校3年2組教室
- 4 教材名 魯迅「故郷」(光村図書 『国語3』)
- 5 教材(題材, 単元)について

本教材は令和7年度改定の教科書にも全社掲載されており、長く扱われるいわゆる典型教材と呼ばれている。多くの優れた実践がある一方、生徒からは「難しい」「内容が重い」と言われる教材でもある。今年度、生徒にアンケートを取ったところ、言葉や文化が難しい、回想が多くて時系列が分かり難い、登場人物の気持ちが分かり難い、最後の部分の「道」が何を表しているか全くわからないといった意見が多くあった。魯迅の「故郷」は、1921年雑誌『青年』に発表され、1923年に魯迅最初の小説集『呐喊』に収録されている。100年前に書かれた中国が舞台の小説を読む意義を考えるために、「故郷」が教科書に採択され始めた戦後や多くの会社が採択した高度経済成長期と重ねてみると、変化の激しい時代が「もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になる。」という言葉を感じてきたように感じる。魯迅は当時の中国の社会体制を「鉄の部屋」と呼び、「窓はひとつもないし、こわすことも絶対にできんのだ。なかには熟眠している人間がおおぜいいる。まもなく窒息死してしまうだろう。」と述べている。既存の社会に熟眠した人間を起こす文章としての「故郷」の役割を生徒が掴めたなら、高校進学を前にして文学の力を意識したり中学校3年生として社会的な視座を拓いたりすることができる教材である。

生徒たちは、語り手が一人称の小説として「少年の日の思い出」や「握手」の学習をしており、一人称の語り手の捉えによって語られ方や読者である私達の印象が変わることを学んできた。作者と主人公が酷似していても実は違いがあり、そこに文学の虚構性があることはこれまでの学習の積み重ねによって理解できている。しかし、一人称の語り手が捉えていない、語っていない部分があることは理解できても、それを補ったり、語り手のフィルターを修正したり、語り手像を構築するのは難しい生徒が多い。そのため、集団や生徒個々の発達段階をふまえて「語り手」の授業での扱いを吟味し、柔軟に対応したい。また、「走れメロス」と「握手」では登場人物の立場になって作品世界を捉えるという文学体験を積み重ね、作者に関する文章を読むことによって自己の読みをより確かなものにしてきた。その反面、「自分は登場人物の心情を想像するのは苦手だ」と感じている生徒は4分の1程度いる。また、アンケートで明らかになった「故郷」に内在する難しさは、いわゆる生徒学力層に関わらず感じているため留意して単元構成をする必要がある。

指導にあたっては、文学体験を軸とした豊かな読みを目指すには言葉の理解が欠かせないと考える。そのため、意味調べをして共同編集で「故郷辞典」を作り、学習のゴールイメージを共有することや作者について知ることを0次として設定する。テキストを丁寧に確かに読む授業を1次として展開し、最後に第2二次として豊かな物語世界を表出する言語活動を設定することが有効だと考える。読解に難しさを感じる生徒のために、読解のキーワードを〔 〕内に書く活動によって何度も本文を読むことと「できた」という感覚をもてるようにする。また、楊おばさんとの再会の場面は本文を脚本の形で生徒に示し、口調、動作、心情をト書で表現する。配役を決めてセリフを読み演じることで、生徒は自然と登場人物の心情や人物像を考え始める。「故郷は難しい」と構え過ぎることなく、自分なりに人物を捉えて物語を楽しむことが可能になる。本実践では、登場人物を選んで立場に立つ活動として、「故郷」のあとが

きを登場人物になりきって書くこと、と設定した。その際、登場人物の心情を想像することが苦手な生徒への支援として着目する観点を複数示す。ICTと板書を活用して「故郷」の難しさを超え、魯迅の伝えなかったことを考え自分のものの見方を広げるような授業にしたい。

6 教材（題材、単元）の目標

- (1) 文章中のわからない言葉をメモして調べ、言葉や知識を豊かにすることができる。
- (2) 語り手の表現に着目して、語り手の捉えを考えて読むことができる。
- (3) 自分が設定した目標の達成に向けて、主体的に考え他者の意見から読みを深めようとする。

7 指導計画（全7時間）

次	時	学習内容
0	1	便覧で魯迅を調べる。言葉や中国文化について調べたこと、初読でとらえた人物像や心情をスプレッドシートに入力して学年で共有する。
1	2	既習教材の一人称の語り手の特徴を思い出し、「私」との共通点を考える。「私」の置かれた状況や人物像を考える。(教科書始め～P99)
	3	ヤンおばさんの言動から支配者層に対する想いを考える。ヤンおばさんの描写から「私」の人物像を考える。(教科書 P103・17行目～P105・16行目)
	4	記憶の中のルントウと、「私」の想いを考える。(教科書 P100～103・16行目)
	5	ルントウとの再会から、「私」と母の想いや人物像を考える。香炉と燭台に着目し偶像崇拜についてイメージする。(教科書 P105・17行目～109・7行目)
	6	ホンルとシュイシヨンの関係と「私」とルントウの関係に着目し、「希望」と「地上の道」が何を表すか考える。魯迅の書いた「自序」を読んで考えを深める。(教科書 P109・8行目～終わり)(本時6/7)
2	7	ルントウ、ヤンおばさん、母、ホンルの中から選び、その立場に立って「故郷」のあとがきを書く。自分が作者だったら何を伝えたくて創作したかを考え表現する。自分の問を他者と共有し、読みを深める。

8 本時の目標

ホンルとシュイシヨンの関係と「私」とルントウの関係の共通点と相違点と魯迅の「自序」から、「希望」と「地上の道」が何を表すか考え表現できる。【思考・判断・表現】

9 「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」との関連

基準	具体的な児童・生徒の姿
Ⅲ	登場人物の関係性を明示して「希望」が何を表すのか表現し、「自序」の言葉を引用して「地上の道」が何を表すか考え表現できる。
Ⅱ	「希望」と「地上の道」が何を表すか考え、自分の言葉で表現できる。
Ⅰ	「希望」と「地上の道」が何を表すか、両方とも表現できていない。
手立て【関連する教師の資質能力】	
○ 初読の感想として教材の難しさをアンケート調査し、生徒に必要な学習内容を捉えること。【授	

業分析・評価力】

- 教科書本文からのみ読解するのではなく、解釈を進められるような教科書外の資料を用意する。
- 初読の感想と共に自分の分りたいことやできるようにしたいことを書いて、自己目標を設定しそれに向けて学ぶ意欲を高めるよう工夫すること。【授業構想力】

10 学習の展開

学習活動と内容	指導上の留意点（◆評価）
導入（5分） 偶像崇拜とは何かを復習し、その象徴としての香炉と燭台をルントウが欲したことを復習する。ルントウの価値観や旧来のものを大事にする人のイメージをもつ。	○ 教師の説明が多くならないように、辞書での意味を提示する。また、自分が貧しいルントウなら何が欲しいかを考え交流することによって、「私」が「偶像崇拜だな」と言った状況や心情を想像しやすくする。
【課題】「希望」と「地上の道」が何を表すか考え表現しよう。	
展開1（20分） ホンルとシュイシヨンの関係と「私」とルントウの関係に着目し、「希望」が何を表すか考える。 展開2（20分） 魯迅の書いた「自序」を読んで、「地上の道」が何を表すかを考える。 まとめ（5分） 次時に登場人物の立場になって作文を書くこと、作者が何を伝えたいのかを考えること、読みの共有をタブレットですることを予告する。	○ ホンルとシュイシヨンの関係と「私」とルントウの関係の共通点と「私」の未来に対する想いをまとめる。 ○ 抽象度が高い部分なので、魯迅の言う「鉄の扉」である当時の中国の世相を分かり易く伝える。 ○ 全体発表の際に、生徒の思考が深まるような順番になるように発表者を指名する。 ◆「希望」と「地上の道」が何を表すか考え、自分の言葉で表現できる。【思考・判断・表現】 (ワークシート)